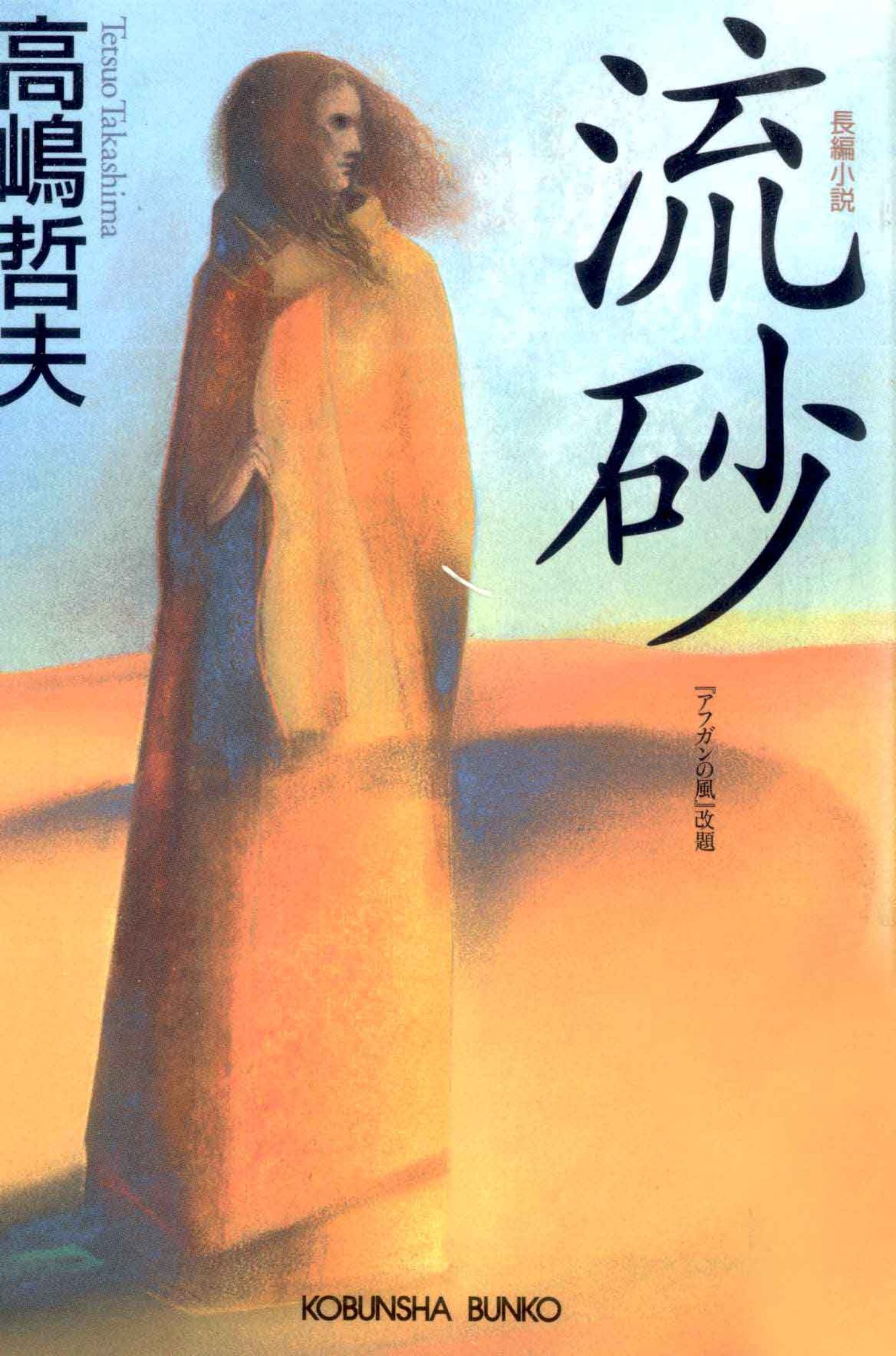




高嶋哲夫

Tetsuo Takashima

流砂

長編小説

『アラガンの風』改題

KOBUNSHA BUNKO



光文社文庫

長編小説

りゅう

流

さ
砂

著 者

たか しま てつ お
高 嶋 哲 夫

2004年12月20日 初版1刷発行

発行者 篠 原 睦 子
印 刷 堀 内 印 刷
製 本 フ ォ ー ネ ッ ト 社

発行所 株式会社 光 文 社

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6

電話 (03)5395-8149 編集部

8114 販売部

8125 業務部

振替 00160-3-115347

© Tetsuo Takashima 2004

落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。

ISBN4-334-73802-8 Printed in Japan

[R]本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

光文社文庫

江苏工业学院图书馆

長編小説

流砂

『アフガンの風』改題

藏書章

高嶋哲夫



光 文 社

目次

プロローグ

第一章 東京

第二章 アフガニスタン

第三章 再会

第四章 希望

エピローグ

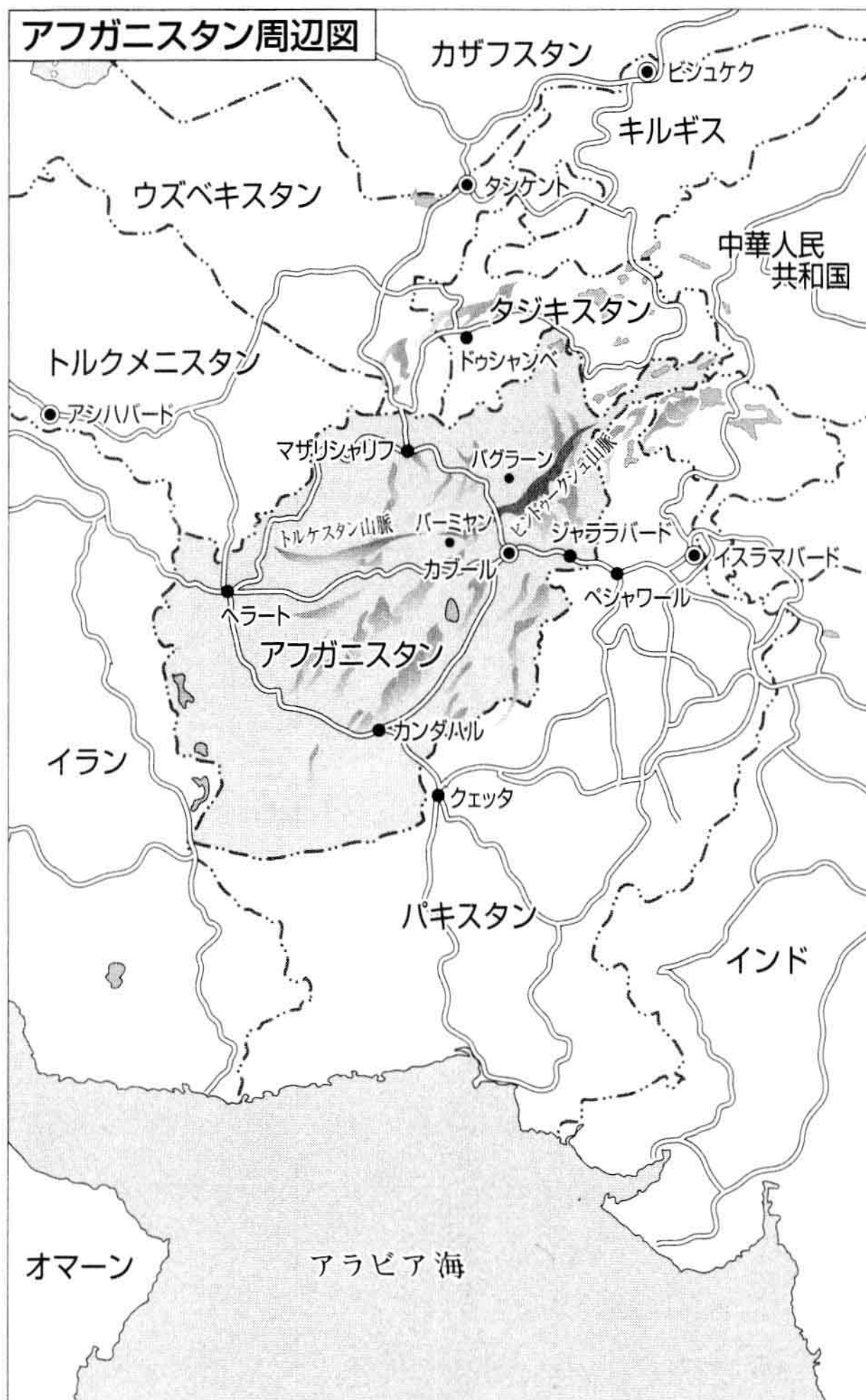
解説

末國善己すえくによしみ

518 513 375 248 117 14 7

流 砂

アフガニスタン周辺図



プロローグ

二〇〇二年、一月。

雲ひとつない紺碧こんぺきの空。

眼下には四千メートル級の山々が連なっている。その間に、砂を含んだ白っぽい岩肌の丘陵と谷が続く。山岳地帯、まさにその通りだ。

「あれがヒンドウクシュ山脈よ。カイバル峠があるところ」

女は窓側に座っている二人の子供に説明した。子供は窓に額をつけるようにして見ている。十五歳になる娘と六歳になる息子だ。娘は膝ひざの上に、テディベアをしっかりと抱いている。日本を発つたとき、父親に頼まれたと言って外務省職員から渡された縫いぐるみだ。以前、娘がひどく欲しがっているのを父親が覚えていたのだ。

娘のデイパックには、アレクサンダー大王の伝記も入っている。日本を発つ数日前、東京の本屋でおばあちゃんに買ってもらった。アレクサンダーさんどうほうしはあの峠を通してマケドニアからインドに遠征したのよ。シルクロードを通ってきたのは三蔵法師。娘は好奇心に目を輝かせながら説明してくれた。

女は子供たちが伝説の山々に見入っているのを確認して顔を上げた。

東京を発ったのが三日前。インドのニューデリーに二日滞在して市内をまわった。スラム街のストリートチルドレンを見た。子供たち、特に娘は衝撃を受けたようだった。

そして今朝、ニューデリー発パリ行きの飛行機に乗るはずだった。

予定の飛行機が突然エンジントラブルを起こし、出発が延期になった。

現地大使館員と名乗る男の手配で、中型チャーター機に乗り換えた。双発のジェット機だ。どうしてもその日の飛行機に乗るように夫から連絡があつたと言う。

機内はひっそりとしていた。

女は伸びをするふりをして後ろを見た。

乗客はヨーロッパに出稼ぎに行くインド人が多かった。

機内にはいくぶん緊張した空気が漂っている。あのニューヨークテロ事件以降、四カ月の間に世界で三機の旅客機が墜落した。そのうちの二機は意図的に墜落させられている。一機はフランスのラロルテ近くの丘陵に落ちた。正確に言えば撃墜されたのだ。

マルセイユ空港を発ったロンドン行きボーイング機は、イスラム過激派にハイジャックされた。ボーイングはラロルテ方面に航路を変えた。その先には――原子力発電所がある。そのため緊急発進したフランス空軍機によってミサイルを撃ち込まれた。

もう一機はサンフランシスコ発、ハワイ行きで太平洋に消えた。荷物室が爆発したのだ。回収された乗客の荷物のひとつからプラスチック爆弾が仕掛けられていたことが判明した。

三機目はニューヨーク発、サンフランシスコ行き。飛び立った直後、エンジンが火を噴いて爆発した。火は燃料に引火して地上に着く前に炎上した。

政府はエンジンの整備不良らしいと発表した^が、テロの可能性も拭いきれないと、あいまいな言い方をしていた。

世界は狂っている、と女は思う。こうした世界に子供たちだけは巻き込みたくない。嫌な予感がした。女の予感によく当たる。十六年前のあの夜も……。

機体が激しく揺れた。

大きく旋回している。

「シートベルトをお締めください。気流のため機体が少々揺れます」

スチュワートが妙に甲高い声^{かんだか}で言った。

子供たちのベルトを確かめる。大丈夫だ。

スチュワートのほうを見ると、必死で冷静さを保とうとはしているが顔が強ばっている。もう一人の姿は見えない。

シートのどこかから悲鳴に似た声が聞こえた。

「ママ、あれ」

娘の声に身体^{からだ}を乗り出したとたん、機体が大きく揺れる。

悲鳴が上がり、子供の泣き声が響いた。

「みなさん、大丈夫——冷静に——」

スチュワードスの懸命の呼びかけも声にはなっていない。

「エンジンを見る。煙だ！」

男の声がした。

機内は泣き声と悲鳴に満ちる。

機体が下がり始め、大地が斜めになって迫ってくる。

ベルトが腹に食い込み、身体が千切れちぎれそうに痛んだ。

娘は歯を食いしばり、テイベアを抱き締めて痛みに耐えている。息子は泣いているが、声はエンジン音と周りの声にかき消されて聞こえない。

数秒後、機体は速度を落とし、なんとか水平飛行に戻った。

身体が急に楽になり全身から力が抜けていく。

前方に続いている岩場の間に穏やかな丘陵が見えた。

大地がみるみる近づいてくる。

女はジェットコースターを思い出していた。ある男と千葉にある遊園地で乗ったジェットコースター。あのとき男は、きつく目を閉じて女の手を握っていた。

「両手を頭にのせて！」

子供たちに向かって叫んだ。

激しい衝撃。ベルトが腹に食い込み、頭が前のシートの背にあたった。

機体が大きくバウンドする。

身体を横に傾けて、子供たちを強く抱き締めた。

マホガニーの壁に天井。床はよく磨き込まれた組み木模様のフローリング。壁にはどっしりとした木製の本棚と飾り棚が並んでいる。どこか帆船の船室を思わせる造りだった。

広くとられた窓には厚いカーテンが引かれ、天井のシャンデリアとスタンドの人工的な光が室内を照らしている。

窓の前の大型デスクには、パソコンとウイスキーボトルが不思議な調和を保って置かれている。

葉巻の強い匂い^{にお}が漂^いっていた。

高い背もたれのついた椅子^{いす}にサングラスの男が座ってテレビを観ていた。

へ昨年暮れに発足した、アフガニスタン暫定行政機構は——首都カブール北方のグラム空軍基地に到着した暫定行政機構のメンバーはただちに——完全に平静を取り戻し、新政府の機能も——北部同盟を含めたアメリカ、イギリスの部隊は——暫定行政機構議長のカルザイ氏はアメリカ国防総省の高官——

マイクを持った中年の男が早口の英語でしゃべっている。背後には土色の街と、行き交うアフガニスタンの人々の姿が映っている。画面全体が灰色のスクリーンで覆われたような埃^{ほこり}っぽい色調だ。

サングラスの男はリモコンを取ってテレビを消した。

椅子から立ち上がり、壁の前に歩いた。ステッキの静かな音が響く。

縦一メートル横二メートルの地図が二枚貼^はつてある。ひとつは世界地図。地図の中央にある国はアメリカだ。

もう一枚は、アフガニスタンの地図だった。その大半が濃い土色に塗られた山脈で、半分は砂漠の黄土色である。

二枚の地図の数箇所に、赤と青のピンが刺してあった。
慌^{あわ}ただしいノックの音がした。

「入れ」

サングラスの男は地図を見たまま声を出した。

黒っぽいスーツの長身の男が入ってくる。

「ハトが行方不明になりました」

男が困惑した口調で言った。

サングラスの男の動きが一瞬止まり、ゆっくりと振り返った。

「ニューデリーを発ったチャーター機の機影が、アフガニスタン上空で突然消えました」

「消えた？」

「不時着した模様です」

「ハトの生死は？」

「乗客と乗員五十三名は全員無事です」

「確認はとったか」

「情報部にも確かめました。間違いありません。機体の衛星写真もあります」

「奴らは動いているのか」

「いえ、何も悟ってはいないようです。今のところは――」

「時間の問題だ。ハトの行方は？」

「不明です」

「急いでハトを檻おりに戻せ。あらゆる手を打つように」

男は一礼して出て行った。

内心は怒鳴りつけた気分だった。

予想外のことが起こるのは、計画を実行する部下が間抜けなせいだと信じていた。だとすれば、昨年の九月十一日以来、自分の部下はすべて間抜けと言うことになる。そしてまた――。ため息がもれた。

サングラスの男は地図に向き直った。こんな地の果てのような国に、どうしてこうまでも翻ほん弄ろうされなければならないのか。

窓の前に行つてカーテンの隙間すきまから外を覗いた。思わず目を閉じた。光が脳の奥まで浸透してくる。陽の光はサングラスをかけていても強すぎる。いつから光を恐れるようになったのか。

前方には高層ビルの連なりが見えるはずだ。その向こうには皇居の森。

窓から離れ、再び地図の前に立った。

第一章 東京

1

激しいロックの音楽に乗って、女はよじるように身をくねらせる。

身長百七十三センチ、体重は……おそらく五十キロにも満たないだろう。細く長い手足を優雅に空中で波打たせている。

ライトブルーの薄い布を巻きつけたような服の胸にわずかな膨らみが感じられ、その左右中央に乳首が透けて見えた。

短く刈り込んだ金色の髪が、白いうなじを際立たせている。

抜けるような白い肌、大きな目、そして真っ赤な唇。鼻筋はすっきりと通り、顔全体に中性的な神秘さが漂っている。

身体の線を滲にじんだように浮き上がらせ、女性の持つ生々しさを強調するこのドレスは、芸術と通俗のぎりぎりのところだろう。

私は35ミリレンズを覗きながら、シャッターを押し続けた。

「エミちゃん、すごくきれいだよ。もっと両腕を広げて。きみは蝶^{ちょう}だ。揚^あ羽蝶^はなんだ。もつとはばたいて。顔を上げて。きみは陽に向かつて、大きな羽根を広げている蝶なんだよ」

私は助手の秋山から75ミリレンズをつけたカメラを受け取る。撮影を始めてすでに一時間がすぎている。

モデルの肌になめらかな肌を数ミクロンの汗が覆い始める。潤いを帯びた肌の細胞は瑞々^{みずみず}しく、艶^{なまめ}かしく、女の美^{あや}しさと妖^{あや}しさをかもしだしている。

ニコンF4はその変化を敏感にとらえる。

不意に私の脳裏から色彩が消えた。

あれほど生き生きと跳躍していたモデルが、突然木偶^{でく}人形のようなぎこちない動きに変わった。

「先生、どうしたんですか」

秋山がカメラを持ったまま動きを停止した私の顔を覗き込んでいる。気がつくともモデルのエミも照明の遠山も私を見ていた。

「いや、なんでもない。ちよつと休もう」

「センセ、昨夜またすぎたんじゃないですか」

エミが笑いを含んだ声で言った。しかしそれは、決して嫌味なものではない。

私はスタジオの隅の椅子に座って、ペットボトルの水を飲んだ。